月刊

JMITU

ディスカ

新型コロナ対応版

1月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2023年発行

No,457

２０２３年春闘　大幅賃上げで物価高騰による暮らしの危機をはねかえそう！

23春闘　物価高騰から大幅賃上げが不可欠

「スーパーの支払いから千、２千円と増えている。少しでも安いものをと買えば量が少ない。」と異常な物価高は続いています。深刻なのは、値上がりが集中しているのが生活に欠かせない食料品や燃料代だという事です。

　これだけ物価が上昇したのは３１年前のバブル経済以来です。当時と今で大きく異なることは、私たち労働者の賃金です。当時は物価も上がっていましたがそれ以上に賃金も上がっていました。

　物価高騰の背景にはロシアウクライナ戦争の長期化・泥沼化し、原油や小麦粉の国際価格高騰は当分続きそうです。政府は、消費税減税などの抜本的な対策をするべきです。

低い日本の賃金

　この２０年来、日本は賃金の上がらない国になってしまいました。日本の賃金の異常な低さが社会的な認識となり、国内の消費購買力を弱め、経済成長の足かせになっています。

　それだけではなく低賃金や労働者使い捨ての人事政策により多くの企業では、技術・技能が継承できず、日本の国際競争力が急速に弱まっています。低賃金が少子化の原因になっています。

　実際、同じ年齢の賃金を２０年前と比べると大幅に下がっています。しかもこの１０年で消費税が５％から１０％へ増税され、年金保険料も大幅に増額しており、手取り金額はそれ以上に減っています。

　そこに物価高直撃しているのだからもう限界です。

　日本の賃金が上がらないのは日本の経済や企業が厳しいからではありません。大企業はこの２０年間で、利益も株主への配当も増やし続けています。内部留保は過去最高を更新し続け、全体で５００兆円に迫っています。

　賃金が上がらない国になったもう一つの要因は、「ワーキング・プア」と呼ばれる低賃金で働く労働者が、この２０年間で急増したことです。

　パート、アルバイト、派遣など非正規雇用です。いまや年収２００万円以下の労働者は、１１００万人を超えています。この中には、現在コロナ渦で収入が激減し極めて生活が大変です。

　非正規雇用など低賃金で働く労働者の賃金引き上げは切実に求められています。

　それは労働者全体の賃金を底上げすることにつながります。

岸田内閣の経済政策

岸田内閣の経済政策には「賃上げ」が位置付けられています。しかし、その中身は①ジョブ型雇用以降の指針づくりなど財界と一体となった成果主義賃金の推進。②転職・副業の受け入れ企業への財政支援。③解雇規制の緩和

（無効解雇の金銭解決）など　上げどころか雇用と暮らしは破壊されてしまいます

というものです。これでは賃

２０年で所定内賃金はこんなに下がっている

	高卒・男性			大卒・男性		
年齢	1999年	2021年	差額	1999年	2021年	差額
18～19	170.3	185.6	15.3			
20～24	197.9	204.3	6.4	215.9	231.1	15.2
25～29	236.9	234.5	-2.4	257.5	267	9.5
30～34	277.4	261.1	-16.3	331.4	314.1	-17.3
35～39	312	284.7	-27.3	401.6	364.8	-36.8
40～44	343.5	307.7	-35.8	457.7	407.2	-50.5
45～49	376.4	332.7	-43.7	522.6	451	-71.6
50～54	400.9	346.5	-54.4	580.2	505.2	-75
55～59	386.8	351.8	-35	584.2	505.3	-78.9

厚労省・賃金構想基本調査（民営事業所、一般労働者）所定内給与額　＊単位：千円

消費税減税

一番の不公平な税制が消費税です。消費税は所得に関係なく、すべての国民に一律に増税される最悪の税金です。

これまでに何度か増税され今や１０％です。消費税増税のたびに社会保障の財源と政府は説明していましたが、社会保障は改悪続きです。物価高騰で苦しんでいる今こそ減税すべきです。

軍事費43兆円の増額

軍事費は１０年連続で前年度比を上回り、８年連続で過去最大を更新しています。

背景には岸田首相が台湾有事への参戦を要求している米国へ、軍事費の相当な増額を誓約したことがあります。

今必要なのは軍拡ではなく、社会保障の充実です。

解雇無効の金銭解決

厚生労働省が解雇無効の金銭解決制度導入を検討しています。解雇無効の金銭解決制度とは、会社が労働者にお金を支払えば違法な解雇であっても有効な解雇になる制度です。日本では解雇は、会社が自由に行うことはできないと判例が確立され、労働契約法に盛り込まれました。

労働者が解雇された場合は裁判で争うことができこのような制度は必要ありません。

金銭で解決できる制度ができてしまえば、会社は解雇する道具にすることは明らかです。実際に支払われる金銭も数か月分ともいわれています。

こうした雇用破壊が広がる最悪の制度導入は阻止しなければなりません。

掌編小説

ドアを開けるな

仙洞田一彦

伊井は、もし自分が連続強盗事件の被害者になったらと、不安だった。この間までは振り込め詐欺の不安だった。とはいえ詐欺にかかる程の金もなかった。しかし、強盗は殺されるかもしれないのだ。

伊井は木造アパートの一室の四畳半の部屋に一人で住んでいた。結婚して子供もいたりしたが、いろいろあって、まったくの一人暮らし。半畳の炊事場。半畳の押し入れ。四畳半一間では、寝起きするのに必要最小限のものしか置けないし、全財産といえばここにあるだけだった。伊井自身も八十歳に近い。老い先もないので欲もないといいたいが、うまい酒を飲みたいくらいの欲はある。

大家は露木という名のお婆さんだった。歳は聞いたことがないが、だいたい自分と同じくらいの歳だろうと伊井は思っていた。

アパートの隣に住んでいる大家に家賃を払いに行ったとき、支払いが済んで黙って帰るのもなんだから、世間話のつもりで、その不安を話した。

「連続強盗事件、怖いですね」

「怖いですねえ」

大家は同じ言葉を返してきた。

「もし、うちに来たらと思うと不安ですよ。情け容赦ないんでしょう。手足を縛られて、殴る蹴るなんて恐ろしい」

すると、すぐ大家から言葉が返ってきた。

「強盗に狙われるほど、伊井さんは財産があるのですか」

「いや、ありません。不安というのは、ありえないことと思っても襲ってくるものです。また金がないことに腹を立てて、暴力をふるうかもしれませんからね」

「もし、財産があるなら、家賃を少し上げさせてもらおうかね」

「いや、いや。本当、ありません。ないです」

伊井はあわてて顔の前で、右手を左右に振りながら否定した。

「しかし、強盗の勘違いっていうのもあるでしょう」

「あんたも、おもしろいこと言いますね。強盗の勘違いとは、そりゃ、その時さね。あきらめるしかないね」

大家が鼻で笑いながら、強気な言葉を返してきた。

「しかし、勘違いで殺されたんじゃ」

「強盗が勘違いするかね」

「たしかに強盗団が来て、こんなボロアパートに住んでるなんて、指示役の指示が、何かの間違いと思うかもしれませんね」

「なにっ、ボロアパート、いやだったらいいんですよ。すぐに出て行っていただいていいんですよ」

「すみません。すみません」

伊井は平謝りにあやまり、頭をペコペコ繰り返し下げ、手を左右に振り、大家の玄関を出た。

自分の部屋に戻り、鍵を開けて部屋に入った。それから

鍵を掛け、掛けた鍵を指差し「よし」と声を出して確認した。

大家に、うっかり変なことを言ってしまったと反省しながら、電気炬燵に足を突っ込んで寝そべった。座布団を二つ折りにして頭に当てて天井を見ながら思った。

大家はああ言ったけど、勘違いは誰にでもあることだ。強盗団の指示役が、大家を指示したのに、実行役の強盗団の方の勘違いで、俺の部屋に来るかもしれない。瞬きもしないで天井を見ていたが「それはない」と自分の思いを否定した。築半世紀以上のガタの来たアパートを目にすればあり得ない。絶対にありえないと考えながらも、不安は拭いきれない。要は油断しないことだ。自分に言い聞かせた。

新型コロナを、インフルエンザ並みの扱いにするという。有料になったら、うっかり病院に行けやしない。年金で暮らしている高齢者連中を減らそうっていう魂胆だろう。少ない給料から、高い年金保険料はちゃんと払ってきたんだ。ただもらっているわけじゃない。物価は上がるのに、年金は上がらない。寒い日が続いてどこからともなく隙間風が入る。連続強盗の話は、生きにくさに拍車をかける。

その時ドアがノックされた。ベニヤ板製のドアで、しかも長年の使用でガタが来ているから大きな音がする。ドアと畳の部屋との間には半畳の空間、そして仕切るカーテンしかないからよく響く。

寝そべったまま「はい」と言った。それから、体を起こして立ち上がり、ドアのところに行った。ドアを開けずにもう一度「はい」と言った。

「伊井さんですか」

ドアの向こうから男の声が返ってきた。

「はい」

「宅配便ですが」

伊井はドアを開けようとしたが、強盗団は宅配便を装うと言っていたテレビニュースを思い出した。どこから宅配便が来るのか思い当たらない。買い物をしてもいない。親戚知人を思いめぐらしても、宅配便が結びつかない。

「たしかに、うちですか」

伊井はドアに口をつけるようにして、もう一度確認した。

少し間があって、ドアの向こうから聞こえてきた。

「あれ、勘違いかな。よその伊井さんか。こんな高価なもの、配達間違えたら大変ですものね。失礼しました」

高価――の声で、伊井は反射的に鍵を外し、ドアを開けた。相手の顔との間は三十センチばかり。宅配便の制服、制帽の人の好さそうなあんちゃんが、ニコッと笑みを浮かべて、そして言った。

「今どき、どこもドアを簡単に開けてくれないんで、いろいろ、その場に応じて試してみてるんです」

それから手に持った伝票を見て言った。

「やっぱり住所違いの伊井さんでしたね。勘違いでした」

頭を下げると行ってしまった。